

〔研究ノート〕

エール大学図書館・ウイリアムズ家文書の

吉田松陰渡海密書二通について

夜 久 正 雄

(一) ペリー提督と吉田松陰

日米関係史の第一ページを飾る事件は、言ふまでもなくペリー提督による日本開国——日米和親条約の締結であつたが、そのかげに、一閃の火花を放つたやうなペリー提督と吉田松陰との魂の接触があつたことを、忘れてはならない。日米和親条約が、つづく通商条約となつて、いはゆる「不平等条約」としてその後の日本国民の苦悶の種となつたのに対して、ペリー提督が、当時「瓜中万二」といふ偽名を使つた、一介無名の志士にすぎなかつた吉田寅次郎（二十五歳）の愛国心にふれて深く感動し、その処罰を助けようとして非常な配慮をしたこと、密航を企てたこの二人の青年の言動の中に日本の将来を予想したこと、——このことこそ日米関係の光明の源であつた、——と、私は、そんなふう⁽¹⁾に考へてゐる。

したがつて、松陰の密航の企てについての記述、ならびに『ペリー日本遠征記』等のアメリカ側の記述には、特に注意せざるを得ない。



紋松家
家塾と松田家
家と松田家
『松田家
陰遺墨展
示館』
より写す

である。

私は最初、ウリナカと読んでゐたが、『吉田松陰全集』（岩波書店、書き下し文の全集）の『回顧録』の頭註に拠つて、クワノウチ・マンジと読むべきことを知つた。⁽²⁾

ところが、フランシス・ハウクスの『日本遠征記』⁽³⁾には、

ISAGI KODA

KWANSUCHI MANJI

とある。

イサギ・コーダは、松陰に同行した金子重之助（重輔 しげのすけ）の偽名であるが、これも「市木公太イチギ・コウダ」とあるはずである。

金子重輔は松陰に随つて決死の密航を企てたのであるが、当時、「渋木松太郎」といふ偽名を使つてゐた。この「渋木」から「柿」↓「市木」とし、「松太郎」から「公太」としたのである。⁽⁴⁾しかし、これはイチギ、あるいはイチギであつて、「イサギ」はをかしい。「誤植であらう」と思つたのである。それにしても、KWANSUCHI もをかしい。これもOとSとの誤植であらう、と思つた。しかし、英語の書物といふものは、誤植が少いものなのに、偽名と

吉田松陰が密航を企てた時、「瓜中方二」の偽名を使つたことは、周知の通りで、司馬遼太郎『花神』（テレビ放映）でも、はつきり説明されてゐた通りである。「瓜中方二」は「くわのうちまんじ」と読む。吉田家の家紋に拠つたのである。周りが「瓜文」^{かもん}で、中が「まんじ」の印である。つまり、「瓜紋」の中が万字「まんじ」であるといふ意味

は言へ重要な人名で、二つの誤植があるのも、理解に苦しむ。

さて、『ペリー日本遠征記』には、ペリーをして非常に感動させた松陰の漢詩と思はれる文章の英訳が載つてゐるのである。これは、松陰が——（当時、松陰の号はまだ使はれてゐない、吉田寅次郎といふ萩出身の二十五歳の無名の青年志士であつた）——密航の失敗を自首して、下田の獄につながれてゐた時、「板切れ」に書いて、アメリカの士官に手渡したものである。その状況を『ペリー日本遠征記』には、かう書いてゐる。（いろいろな翻訳があるが、今は、徳富蘇峰の『近世日本国民史』の32巻『神奈川条約締結篇』——昭和九年十二月十五日明治書院発行普及版——から引用する。）

「数日の後士官の一组が、下田の郊外を散歩しつつあつたが、端なく町の牢屋に出会した。而して普通の囚人として、前の憐むべき二人が、宛も獣檻の如く、其の前面は格子もて遮られ、甚だ狭苦しき、其の裡に拘禁せられつゝあるを見付けた。彼の可憐なる二人が、米国軍艦に至りたること發覚するや、直ちに追跡せられ、やがて捕縛せられ、此に打ち込まれたのだ。彼等は其の不幸をば、泰然自若として忍受しつつある模様だ。而して米国士官の見舞うたのを、殊に喜ぶものゝ如く、而して好様に米国士官の眼に映ぜんことを勵めたる模様であつた。士官の一人が檻前に近づきたるに、彼等は板片に左の如き文句を書したものを、格子から差出した。それは実に羅馬の硬漢ケト一の剛腸さへも試煉す可き、此の場合に際して、哲學的委命安心の、尤も驚嘆す可き標本として、茲に記載す可き価値がある。」

かう書いて掲載されたその英訳の文章を蘇峰はさらに次のやうに和訳してゐる。

「英雄漢一たび其の計企を過てば、彼の行為は、悪漢、盜賊の行為と同一視せらる。我等は衆人の目前に於て、捕へられ、縛められ、而して多日檻中に拘禁せらる。村の長老、役頭等の我等を侮辱する實に甚だしく、其の压制は

実に辛抱し難くある。然も我等は自から顧みて、内に一の疚せましき所が無い。今や実に英雄漢が英雄漢であるや否やを試めず時である。六十余州を踏破するの自由は我等の志を満足せしむることが出来ない。此を以て我等は五大州の週遊を希図した。此れは我等多年の心からの願であつた。而してそれが一朝にして躓つまずいた。今や我等は此の狭苦しき檻中に禁錮せられ、飲食、休息、坐臥、睡眠、凡て困難だ。我等は如何にして此中より脱出す可き乎。それはとても出来る事ではない。泣かん乎、愚人の如く、笑はん乎、悪漢の如し。嗟呼、我等の取る可き道は、唯だ一の沈黙あるのみ」と。

この詩的な和訳文の原文は註(6)に掲げる通りの英文である。⁽⁶⁾

英訳のものとの松陰筆の原文は、恐らく漢詩だつたのではないかと想像されるが、それについては、松陰の『回顧録』には一言も触れてゐないし、『吉田松陰全集』にも、これに相当する漢詩は見あたらない。『ペリー日本遠征記』には、前註の通り、「訪問者(米人)の一人がその檻に近づいた時、その日本人は手渡された板切れに次のやうに書いた(拙訳)——

“the Japanese wrote on a piece of board that was handed to them the following”

と書かれてある。咄嗟に書かれたものであるから、散文かと思ふ人も多いかも知れないが、松陰といふ人は、咄嗟に「詩」の書ける、真の意味での詩人であつたので、この原文が漢詩であつたらうといふ想像は、英訳文から見ても、またそれに対するアメリカ側の絶讃の評語から見ても、成り立つのである。

(二) 「エール密書」(エール大学ウイリアムズ家文書蔵)

佐藤司（亜細亜大学）教授が一昨昭和五十年エール大学を訪問して、「瓜中万二を名のる吉田松陰の自筆になる新たな密書（エール密書）を確認し研究に打ちこんでおられた」山口栄鉄講師（エール大学東アジア研究所）に会はれ、そのことを、『亜細亜大学アジア研究所所報』第五号（昭和五十一年十月三十一日）に書かれた、それを読んで、私は、すぐそれは、前述の「板切れ」に書かれた、下田の獄中での松陰の文章ではないかと思つた。そして、是非それを見たいと思つた。

たまたま、昭和五十一年の夏、王瑜（亜細亜大学）教授が中国語教育の実態調査を目的として渡米され、エール大学をも訪問するといふお話を聞いたので、何とかしてこの「エール密書」なる文章のコピーを入手してもらへないかとお願ひした。王教授は、お忙しい日程を割いて、この文章の調査に当られ、二通の文書のコピーを取つて来てくださった。——松陰のいはゆる「投夷書」と「別啓」に相当すると思はれる文書であつた。

『ペリー日本遠征記』には、「投夷書」ならびに「別啓」のウイリアムズ訳が掲載されてゐる。その「別啓」訳は、「投夷書」の「別啓」として、添附されたものの訳で、『吉田松陰全集』所載の「別啓」と同文のものを翻訳したものである。それは下田・柿崎で、三月二十七日、松陰たちが米艦の士官に手渡した文書であると思はれる。さうすると、王瑜教授がコピーして来られた文書は、「投夷書」と、「別啓」以外の一通の文書といふことになる。内容は、「別啓」と同じ趣旨のもので、この文書については、『日本遠征記』には、翻訳が載つてゐない。『吉田松陰全集』にも載つてゐない。重要な新発見といふやうな性質のものとは言へないが、ともかくこれをペリー提督ならびにウイリアムズが、幕府側に対して秘匿し、貴重な文書として保存した心情を思ふと、感動しないではをられない。一口で言へば、ペリー提督は、松陰・重輔といふ無名の青年二人の思想と行動に感激して、何とかしてこの二人を助けたいと

日本國江戶府書生、永中萬二市木公太呈書

貴大臣各將官執事、生等賦稟薄弱、軀幹矮小、固自恥列
士籍、未能精刀槍刺擊之技、未能講兵馬鬪爭之法、況
汎悠、玩愒歲月、及讀支那書、稍聞知毘羅巴米理駕
風教、乃欲周遊五大洲、然而吾國海禁甚嚴、外國人入
內地與內地人到外國、皆在不貸之典、是以周遊之念、勃
然、往來於心胸間、而呻吟蹈跼、蓋六有年矣、幸

貴國大軍艦連掃、未泊吾港口、為日已久、生等熟觀稔察、
深悉

貴大臣各將官仁厚愛物之意、平生之念、又復觸發、今則斷
然、決策將深察請詔、假坐貴船中、潛出海外、以周遊五
大洲、不復暇顧國禁也、願執事辱察鄙衷、令得成此事、
生等所能為百般使役、惟命是聽、夫被虜者之見行走者、

行走者之見騎乘者其意之歎羨如何耶况生等終身奔走不能出東西三十度南北二十五度之外以是視夫駕長風凌巨濤電走千萬里隣交五大洲者豈特跋躐之與行走行走之與騎乘之可譬哉

執事幸垂明察許諾所請何惠尚之惟吾國海禁未除以事若或傳播則生等不徒見追捕召回劍斬立到無疑也事或至此則傷貴大臣各將官仁厚愛物之意大矣執事願許所請又當為生等委曲色隱至於開帆時以令得免劍斬之慘若至他年自歸則國人不必追窮往事也生等言雖疎漏意實誠確執事願察其情憐其意切為疑勿為拒萬乞公太全拜呈

日本嘉永七年甲寅三月八日

已ラリヤシセカイ　カシツクイセタクソコトヲオモヘナイコトニ
 我も亦人世界汝も我も亦人生物秘め内蔵
 ノリニセクレラレヨモモイコクヘワタルコトハニツパンノオモシ
 余も亦人れよ尤異國ハ汝も亦人日本ニ禁
 ニヤアゴトラ　カシツクイセタクソコトヲオモヘナイコトニ
 ニヤアゴトラ　カシツクイセタクソコトヲオモヘナイコトニ
 トウクツクソコトヲオモヘナイコトニ
 當惑ナシ

在ニ報中大物方由承引ニテトウクツクソコトヲオモヘナイコトニ
 市木公太

カキヤキヤノハニ、バヘシニ、アチノウソウオモモ、ウラオモオモイ
 柿崎村、漢意、傳馬舟を艘由家カ市木公太

中教を致カ

甲寅三月廿二日

市木公太

瓜井三二

願つたのである。そのために二人がかういふ文書を提出し
 たことを語りもせず、幕府側にも渡さなかつたのである。
 そのことについては、詳しくはまた後述する。さて、エー
 ル大学ウイリアムズ家文書に残つたこの二通の文書には、
 それぞれ公表に許可を必要とする旨の判が押してある。そ
 こで、さらに、王教授を介して、公表の許可をお願いした
 ところ、快く許可をいただいたので、ここに掲載した。⁽⁸⁾

(三) 「エール密書」ノート

この二通の文書によつて次のことがわかつた。

(一) 『日本遠征記』に ISAGI KOODA とあるのは、誤植ではない。「我等兩人」ではじまる上の文書の「市木公太」のふり仮名の読みがちと見られる。「イチ」か「イサ」か、ちよつとわからないやうに書かれてある。

(二) KWANSUICHI MANJI は誤植かも知れないが、もしかすると「クワノウチ」の「ノ」を「S」と訳したのか

も知れない。

(三) このいはゆる「投夷書」の日付は「三月八日」になつてゐるが、『吉田松陰全集』所載のものは「三月十一日」になつてゐる。

『回顧録』に拠ると、三月八日の記事に「是夜、投夷書ノ付啓ヲ草ス、付啓中ニ云ク、横浜村南、海岸断絶、無人家ニ処ニテ、初更火ヲ点シテ号トスル故、脚船ニテ来リ迎ヘヨト、其地本牧ヘ行ク時、詳ニ是ヲトス」とあつて、「投夷書」を書いたことは記してゐないが、前日七日の記事に「六日草スル処ノ投夷書ヲ出シ、象山(註・佐久間象山)ニ示ス、象山為ニ数字ヲ増削ス」とあるから、前掲「投夷書」の「八日」の日付は納得がゆく。『全集』所載の「投夷書」ならびに「付啓」の日付が、ともに三月十一日となつてゐるのは、『回顧録』には該当記事はないが、日付をこのやうにしたのかも知れない。または、十一日に書いたのかも知れない。

『ペリー日本遠征記』の英訳文の最後には、それぞれ日付が記してあつて、「投夷書」には“April 11”とあり、「付啓」には“April 25”とある。“April 25”はすなはち三月二十七日、松陰たちが乗艦を企てた日である。『全集』所載の「投夷書」ならびに「付啓」は、実際にペリー提督宛に提出したものではなくて、松陰所持の草稿乃至その写しであつたと思はれる。『回顧録』に三月二十八日(既に捕はれてから後)「此時官吏已ニ吾行囊中ノ投夷書ノ稿、又象山去年九月十八日ノ送詩等ヲ得、事皆具陳ス」とあるものが該当するであらう。

松陰が、三月二十七日の朝、米艦士官に手渡したものについては、『回顧録』付記の『三月二十七日夜記』に、松陰とウイリアムズの対談の記録があり、その中に、

「吾等(註・松陰と重輔)云、君(註・ウイリアムズ)吾請ヲキカズンバ其書翰(註・投夷書と付啓)ハ返スベシ、ウイ

リアムス云、置テミル、皆読得タリ」

とあるので、松陰たちは返却を要請したが、拒絶されたのである。

それで前掲の「ウイリアムズ家文書」の二通は、この時、ウイリアムズの手に残ったものと思はれる。

『全集』所載の「投夷書」ならびに「付啓」の日付が三月十一日となつてゐるのは、松陰の「行囊中」のものが、その日付だったからであらう。

ところが、『ペリー日本遠征記』の「投夷書」の翻訳文の日付は“April 11”とあり、「付啓」は“April 25”とある。

「付啓」の April 25 は三月二十七日、すなはち二人の乗艦決行の日で、その朝、上陸中の米艦士官に手渡されたものであるから、これは問題ない。しかし「投夷書」の方の April 11 は、どうも換算のまちがひとしか考へやうがない。前掲の「投夷書」の日付は三月八日であるが、これをウイリアムズの『ペリー日本遠征随行記』（邦訳書二六二ページ）によつて、太陽曆に換算すると、四月五日 April 5 になる。『全集』の「三月十一日」を採れば四月八日 April 8 となつて、いづれも April 11 に合致しない。松陰の手紙（「投夷書」「付啓」）を柿崎で受け取つたのは、スパウルディングといふ軍艦ミシシッピの乗員で、その『日本遠征記』（『吉田松陰全集』第十卷、昭和十一年版）にも、この「投夷書」の英訳が載せてあるが、これも“April 11th”となつてゐる（『同全集』同卷八八二ページ）。

ウイリアムズの『ペリー日本遠征随行記』（新異国叢書 8、洞富雄氏訳）には、各所に訳者の詳細な註記が書いてあつてありがたいが、この日付の問題についても詳細な検討があつて、結局「投夷書」の日付を「三月十一日」と改めてゐる。これは『全集』所載の「投夷書」に拠つたので、ウイリアムズ家文書の文書を見なかつたためであやま

りであらう。

四 『全集』掲載の「投夷書」は「解題」によると松陰以外の人の書いたものであるといふが、前掲の「ウイリアムズ家文書」の「投夷書」と、わづかなから語句のちがひがある。そのちがひと、その箇所訳文（ウイリアムズの訳——『ムリー日本遠征記』等所載）とを対照すると、次のやうになる。

(1) 未能講。兵馬鬪争之法	ウイリアムズ家文書 「投夷書」	『全集』所載「投夷書」 （『ムリー日本遠征記』）	同上（『ムリー日本遠征記』）
(2) 米理。駕。風教	米利。幹。風教	not are we able to discourse upon the rules of strategy and military discipline	we are ignorant of arms and their uses in battle
(3) 幸	幸今 [△]	the customs and education in America	the customs and knowledge of the Americans
(4) 潜出海外	幸今 [△]	Happily	happily
(5) 不復暇。顧国禁	潜坐 [△] 出海外	take us on board your ships as they go out to sea	take us aboard of your ships and secretly carry us to sea
(6) 以事若或	不復顧国禁	even if we do in this, slight the prohibitions of our own country	even if it is dirgarding our laws
(7) 不徒見追捕。召。回。	此事若或	if this matter should……	if this matter
(8) 若至。他年自帰	不徒見追捕	we should unlesly see ourselves pursued and brought back	we shall have no place to flee
	至若他年自帰	for when, by-and-by, we come back	and when we return here at a future day

(9) 生等言雖疎。漏。

生等言雖粗暴[△]

Although our words have only loosely let our thoughts leak out

Though rude and unpracticed in speech

右の対照を見ると、(2)(4)(8)は、字句にちがひはあつても意味にvarietyはないが、(1)(7)(9)は、ウイリアムズの訳文は、「ウイリアムズ家文書」の「投夷書」の翻訳であつて、『全集』所載のものとの翻訳ではないことが明らかである。(3)(5)(6)は不明であるが、右の結論を妨げるものではない。そこで、ウイリアムズの訳文と対照してみる限り、「ウイリアムズ家文書」の「投夷書」が、ウイリアムズが『ペリー日本遠征記』の中で訳したものであることが明らかになる。

松陰が手渡したいはゆる「投夷書」はウイリアムズが翻訳したのであるから、それがウイリアムズ家の文書として残されたことは当然であるが、この歴史的な文書そのものを百二十年後の今日ありありと見ると、感動しないではいられない。ウイリアムズの翻訳の丁寧なことにも驚嘆した。よほど松陰・重輔の心を感じたのであらう。

また、この翻訳はウイリアムズ『ペリー日本遠征随行記』及びスパウルディング『日本遠征記』の中にも出てゐる。この二書の訳文には十数箇所にもわたる相違点があるが、わづかの言ひまはし方のちがひがほとんどであつて、前記のやうな問題箇所は、どちらも同じであるし、またこの両書の訳文が、ウイリアムズ家文書の「投夷書」とはちがつた原文の翻訳であるとも考へられない。それにまた特に『全集』所載の「投夷書」原文とも考へられない。恐らく両者ともに『ペリー日本遠征記』の訳文をもとにして、文章をわかり易く、流暢に直したものであらう。

あまり煩瑣になるので一々例示しないが、全体の印象としても、『ペリー日本遠征記』の中の訳文が逐語訳的であるのに対して、両書の訳は、意識的であると思はれる。

『ペリー日本遠征記』の訳文は、公式文書の翻訳として逐語的に行はれたのである。「艦隊翻訳官ウイリアムズ氏の逐語的翻訳」——a literal translation by Mr. Williams, the interpreter of the squadron——と書かれてゐるので、その間の事情がわかる。これにをらに手を入れて流暢にしたのがウイリアムズの『ペリー日本遠征随行記』の訳文であらう。一九一〇年ウイリアムズの子のF・W・ウイリアムズの編輯で『日本・アジア協会トランザクションズ』Transactions of the Asiatic Society of Japan 第三十七卷二号 XXXVII: Part II に載じた“A Journal of the Perry Expedition to Japan (1853—1854)”『ペリー日本遠征随行記』には、次のやうな脚註がある。「瓜中万二」の註としてであるが、ここに関連のあるのは次の文である(一七二ページ)。

「この事件は、『ペリー遠征記』に述べられてゐる——そこでウイリアムズ博士の翻訳は編輯者の手に委せられたやうに思はれる——またスパウルディングの『日本遠征記』にも述べられてゐる。」(The Incident is narrated in the Narrative of the Expedition, where Dr. Williams' translations of the letters appear to have been submitted to the hand of an editor, and in Spalding's "Japan Expedition," p. 276.)

この脚註は、『ペリー遠征随行記』の編輯者F・W・ウイリアムズの筆と思はれるが、考へちがひをしてゐるのではないかと思ふ。F・W・ウイリアムズは、松陰のいはゆる「投夷書」の翻訳が三通りあるのを知つてゐて、それらがみな父ウイリアムズの翻訳であると考へたので、——ここまでは正しいとして——翻訳のちがひを『ペリー日本遠征記』の編輯者(フランシス・L・ハウクス)の手に帰したのではあるまいか。私は、さうは思はない。逐語訳とそれ以後の改訳の結果だと思ふ。

なほ、この脚註には瓜中万二の仮名が、ヨシダ・トラジロー(吉田寅次郎)すなはちショーイン(松陰)のもので

あることを記し、「ロバート・ルイス・ステイヴァンソンの『人と書物についての随想』の中の、ヨシダ・トラジロウといふ題の論文の英雄である」と書いてゐる。

The assumed name of Yoshida Torajiro (or Shoin), the hero of Robert Louis Stevenson's paper under the name in his "Familiar Studies of Men and Books".

ステイヴァンソンの書物は一八八二年に出てゐる。一八八四年にアメリカで死んだウイリアムズが、ステイヴァンソンのヨシダ・トラジローを読んだかどうかはわからない。

それにもう一つ驚いたことは、トランザクションのS・ウエルズ・ウイリアムズの書(一九一〇年刊)中では、「瓜中万二」が、Kwanuchi Manjiでなく、Kwanouchi Manjiとなつてゐる。Isaji Koodaの方はそのままであるから、後に改められたのであらうか。

それにしても、アメリカ側の三つの日本遠征記の中に、どれにもみなこの「投夷書」ならびに「付啓」の全文の翻訳が載つてゐるのは、著者がこの二人の青年の行動と思想とにどれほど深く打たれたかを語つてゐるものと思ふ。

(五) 前掲の「我等兩人世界致見物度」ではじまる文書は、前述の通り『吉田松陰全集』には掲載されてゐない。日付は「甲寅三月二十二日」となつてゐるのは、見るごとくである。『回顧録』には、

「二十二日……(昨夜ヨリ)是朝付啓中横浜海岸云々ヲ改テ、柿崎海浜云々ニ作り、本書付啓各一通ヲ浄書シ、
波生(註・金子重輔)ト各一通ヲ懐ニシ、夷人ノ上陸ヲ待テ是ヲ与ヘント欲ス……」

とある。恐らく当日決行しようとして果さなかつたのであらうが、いつこの文書をアメリカ側に渡したのか、——よくわからない。この文書は、前述の通り、翻訳もされてゐない。「付啓」と同じ趣旨であるから翻訳の必要もな

かつたのであらう。

一語一語片仮名のふり仮名をつけたのは何故だらう。『回顧録』十九日の記事を見ると、こんなことが書いてある。

「三月十九日……二隻（註・十八日下田着の米艦二隻）船中漢蘭ノ語ヲ解スルモノナシ、故ニ幕吏輩皆其応接ニ苦ンム、因ツテ渋生（註・金子重輔）ト謀ル、今ヤ書ヲ投ズルモ渠かた読ム能ハズ、且彼理（註・ペリー）ノ来ルヲ待ン」

二十一日、「彼理其ノ他ノ將艦来ル」とあるが、なほ念のため、日本語のカタ仮名で書いたのが、前掲の文書であつたのであらう。

この文書はコピーで見ると「投夷書」とは筆体がちがつてゐる。ほんの思ひつきであるが、当時の状況から推して「投夷書」は金子重輔、この「我等兩人」ではじまる文書は、松陰その人の筆ではなからうか。

（四）感想

以上、「エール密書」と言はれる前掲の二通の文書について、日付だとか翻訳だとか細かな知的な検討を加へながら、当時の文獻——松陰の『回顧録』『三月二十七日夜記』『幽囚録』（金子重輔行状）『冤魂慰草』等、渡海失敗後一年前後に野山獄中で書かれた文書を読み、かつこれに照応するフランシス・ハウクスの『ペリー日本遠征記』、S・ウエルズ・ウイリアムズの『ペリー日本遠征随日記』、スパウルディングの『日本遠征記』を読んで、当時の模様を想ふと、感慨無量のものがある。二、三感想を列記したい。

(一) 吉田松陰といふ人は、実に偉い人であつた、といふことを、渡海失敗前後の言動を通じて、ひしひしと感じさせられた。殊に彼は大詩人であつたといふことが、『回顧録』その他の文章を読んで痛感させられた。「詩人」といふのは、単に漢詩や和歌の作者であつたことを指して言ふのではない。行動と思想と表現とが全く一致してゐるといふ意味で、松陰といふ人は本質的に「詩人」なのである。『三月二十七日夜記』は、乗艦渡海当日の失敗の記録であるが、精細にわが事を叙して一点の我執をとどめぬところは、大文章家とでも言ふほか言ひやうはない。司馬遼太郎氏は『花神』の中で、松陰の文章と子規の文章とがよく似てゐると書いてをられるが、たしかにさういふところがある。松陰の辞世の連作短歌と子規晩年の「しひて筆をとりて」の連作短歌との似てゐるところをあはせて考へてみると、この二人が本當の意味のコトバの達人であつたことがわかる。ペリーを感動せしめたのはその言動であつたこと——文章の力が主であつたことも忘れてはならないことである。

(二) 松陰の金子重輔を想ふ情の深さに打たれた。これは、後の松陰を動かす根本の力となつたにちがひない。「金子重輔行状」「冤魂慰草」など、涙なくしては読めない。

(三) 松陰も偉いが、その偉さを感じたペリーやウイリアムズも偉い。

ペリーは、「瓜中万二」を名乗る青年が、吉田松陰であるとは知らなかつたし、知るよしもなかつた。吉田松陰が、有名になるのは、その後の活躍によるからである。しかしこの二人の青年（『日本遠征記』にはジェントルマンと書いてゐる）の言動の中に、日本人の未来を予見したペリーの炯眼は、驚くべきものがある。ペリーが死んだのは、この事件の四年後であるから、ペリーは死ぬまで、「瓜中万二」が「吉田松陰」であることを知らなかつたであらう。不思議な出会いと言ふほかない。

(四) 松陰と言葉を交した通訳官ウイリアムズは、広東に派遣された宣教師で、有名な「チャイニーズ・レポジトリ」の編輯協力者で、シナ学者であつたが、日本の難破船員から日本語を学んで、通訳官としてペリー遠征隊に参加したといふ。「ペリー日本遠征随行記」(新異国叢書8、洞富雄氏訳)の「解説」に詳しい。マタイ伝と創世紀の最初の翻訳者といふことである(一八四七年頃)。彼は一八一二年生れであるから、松陰とボウパタン号の艦上で会つたのは、嘉永七年(安政元年)すなはち一八五四年、四十二歳の年である。一八八四年(明治十七年)、アメリカ婦国(一八七七年)後に死んでゐるので、あるいは「瓜中万二」がステイヴァンソンの「ヨンダ・トラジロー」(一八八二年刊 Familiar Studies of Men and Books の一章)であつたことに、気づいたのではないだらうか。いづれにしろ晩年エール大学の教授となりアメリカ東洋協会の会長となつたウイリアムズが、松陰との対話の相手であつたことは、これも不思議な出会ひである。このことを思ひながら、この二人の艦上でのやりとり(松陰『回顧録』に詳しい)をたどると、歴史とは劇であると感じさせられる。

(五) ペリーは、松陰と重輔とを助けようとして非常な努力をしたことを書き記してゐる。幕府側はそれを配慮してこの二人を遇した。そのことは、松陰の『回顧録』付録の「野山獄来翰節略」中、「豊氏善良ノ人ナリヤト申贈ケル書ノ答」に、江戸から萩への護送が苛酷であつたことを(その虐待のため、足輕の身分であつた金子重輔は病を得て、死ぬのである)痛嘆して、かう書いてゐるのによつてもうかがはれるのである。

「イモイフマイ、大略下田ヨリ八丁堀同心二名、吾輩ヲ江戸ニ護送セシニ比較セバ、其不真切ナルヲ雲泥、茨生ヲ処スル如キニ至テハ実ニ殘忍トモ云ベシ」

しかし、松陰はこの八丁堀同心の待遇のしかたが、ペリーの配慮から来たものとは知らなかつたらしい。ペリー

提督の使者としてウイリアムズ他一名の士官が、下田獄を訪ねた時、松陰は既にそこから移されてゐたからである。下田の奉行所は、ペリーの配慮がうるさかつたので、早く、江戸に護送したもののやうである。

(六) 右のやうに考へ、それにステイーヴンソンの「ヨシダ・トラジロー」を考慮に入れると、英語文獻の中で、最初に、しかも最高の評価を得たのは、吉田松陰その人ではなかつたか、と思はれるがどうであらうか。つまり、世界的人物といふのは、吉田松陰のやうな「……詩人、愛国者、教師、学問の友、改革の殉教者」(ステイーヴンソン)を言ふのであつて、自国の歴史伝統を忘れたコスモポリタンを言ふのではない。これが現代の国際関係の基本なのである。

(七) 松陰は、米艦乗船を企ててその所持品の中に「小折本孝経正文一、和蘭文典前後篇、訳鍵二冊、唐詩選掌故二冊、抄録数冊」を入れてゐる。和蘭語・(英語)を学ぶ用意をして出かけてゐるのである。これは後に伝はるが、明治時代のリーダーたちは、愛国者であると同時に外国語を修得した知識人であつたのである。松陰は乗艦してすぐ筆談するが、それは漢文を書いてゐる。これは、明治時代の知識人たちの外国語修得と考へ合せてみて興味あることである。私は最近、彼らの漢文の素養が、欧米語の修得に非常に役立つたのではないかと思つてゐる。

(八) ステイーヴンソンは『ペリー日本遠征記』を読まなかつたらしい。彼は、松陰の弟子の正木退蔵から松陰のことを聞いて「ヨシダ・トラジロー」を書いたが、独自の見識かららしい。正木は『回顧録』『金子重輔行状』等を読んでゐて、それで話をしたらしい。ステイーヴンソンの文章を読み返してみても、さう思つた。十九世紀の英米人は大変な力を発揮したものである。

註

(1) ベリーと松陰との出会ひについては拙著『詩と政治―明治の詩魂』(昭和四十九年三月発行)の(一)「吉田松陰の光芒」の章に論じた。なほ、徳富蘇峰が既に『近世日本国民史』に次のやうに述べてゐたのを知つて、さすがに歴史を見る眼はするどいと感嘆した。昭和九年刊行の『神奈川条約締結篇』の中である。蘇峰は、『ベリー日本遠征記』の文章を挙げて「第九章 吉田松陰に関する米國側の記事」の結語として、次の通りに述べてゐる。

「以上は米國側の記事である。如何に吉田松陰の此の一举が、彼理提督を初めとして、米國人の眼中に映じたるかは、上記の次第を一読すれば、固より分明だ。失敗は固より失敗であつた。されど決して此の失敗は無用でもなく、無益でもなかつた。そは此の一举によつて、如何に日本人の氣焰を吐きたるかを想へば、吉田寅次郎、金子重輔二人が米國軍艦に乗り付け、海外に遊ばんとしたる一事は、幾百万兩の金錢もて築き立てたる品川の台場や、諸大名の沿岸防禦に比すれば、幾十倍の効果を与へたるや、料り難きものがあつた。乃ち精神的に日本国民が、米國人を敬畏せしめたるは、實に此の一举を以て、最初とし、又第一とするからだ。」(同書、二七五ページ)

(2) 『吉田松陰全集』(書き下し文の全集)第十卷四六二ページ、『回顧録』頭註。

(3) 『ベリー日本遠征記』"Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan, performed in the years 1852, 1853, and 1854, under the Command of Commodore M. C. Perry, United States Navy, by order of the Government of the United States. Compiled from the Original Notes and Journals of Commodore Perry and his Officers, at his request, and under his supervision, By Francis L Hawks, D. D. L. L. D., with numerous Illustrations." Published by Order of the Congress of the United States. Washington: O. P. NICHOLSON, Printer 1856.

(4) 「金子重輔は浜木松太郎の本名なり。重輔已に亡邸し、因つて姓名を變ず。其の先は長門阿武の浜木の人にして、又歳寒の操を慕ふ、為めに自らこれを定む。投夷書には市木公木と為せり。市木は柿なり、柿の実の渋を帯ぶるに取、公は松しんぼうにしんぼうひ省けるのみ。」(『吉田松陰全集』(同前)第一卷三九五ページ「幽囚録」中「金子重輔行状」)

(5) 『ベリー日本遠征記』の原文、次の通り。

"Some days subsequently, as a part of officers were strolling in the suburbs, they came upon the prison of the town,

where they recognized the two unfortunate Japanese immured in one of the usual places of confinement, a kind of cage, barred in front and very restricted in capacity. The poor fellows had been immediately pursued upon its being discovered that they had visited the ships, and after a few days they were pounced upon and lodged in prison. They seemed to bear their misfortune with great equanimity, and were greatly pleased apparently with the visit of the American officers, in whose eyes they evidently were desirous of appearing to advantage. On one of the visitors approaching to the cage, the Japanese wrote on a piece of board that was handed to them the following, which, as a remarkable specimen of philosophical resignation under circumstances which would have tried the stoicism of Cato, deserves a record. ("Narrative of the Expedition....." pp. 422, 423)

(㊦) 福澤『西洋事情』(譯註) 四二二―四二三。

"When a hero fails in his purpose, his acts are then regarded as those of a villain and a robber. In public have we been seized and pinioned and caged for many days. The village elders and head men treat us disdainfully, their oppressions being grievous indeed. Therefore, looking up while yet we have nothing wherewith to reproach ourselves, it must now be seen whether a hero will prove himself to be one indeed. Regarding the liberty of going through the sixty States as not enough for our desires, we wished to make the circuit of the five great continents. This was our heart's wish for a long time. Suddenly our plans are defeated, and we find ourselves in a half sized house, where eating, resting, sitting, and sleeping are difficult; how can we find our exit from this place? Weeping, we seem as fools; laughing, as rogues. Alas! for us; silent we can only be.

'ISAGI KOODA',

'KWANSTUCHI MANJI.'

(7) 『吉田松陰全集』(書き下しもの) 第十卷四三二ページ。『回顧録』三月二十二日の記中に次の通り。

「昨夜より付啓中横浜海岸云々を改めて、柿崎海浜云々に作り、本書(註・いはゆる「投夷書」)付啓(註・いはゆる「別啓」)各々一通を浄写し、浪生(註・金子重輔)と各々一通を懐にし、夷人の上陸を待ちて是れを与へんと欲す。」

同じく二十七日の記中に次の通り。

「二十七日 此を發し、柿崎に往く。幸に一夷の上陸する者に遇ひて書翰を渡す。」

- (8) 一九七六年十二月二十日付エール大学図書館・大学図書館員ラザフォード・マサイン・ロジャース氏発 Chief Research Archivist, Judith A. Shift 氏宛名の「夜久正雄宛書簡」。「In accordance with your request of December 20, 1976, the Yale University Library hereby authorizes you to publish the manuscript material in its collections identified and described as :

In the Williams Family Papers : 2 letters by Manji Kuwanouchi and Kouda Ichigi, 1854, March 8 and 22.

Please cite : Williams Family Papers, Yale University Library.

- (9) 『ペリー日本遠征随日記』(新異國叢書8) 洞富雄訳、雄松堂書店、昭和四十五年七月三十日初版)二六八ページ。